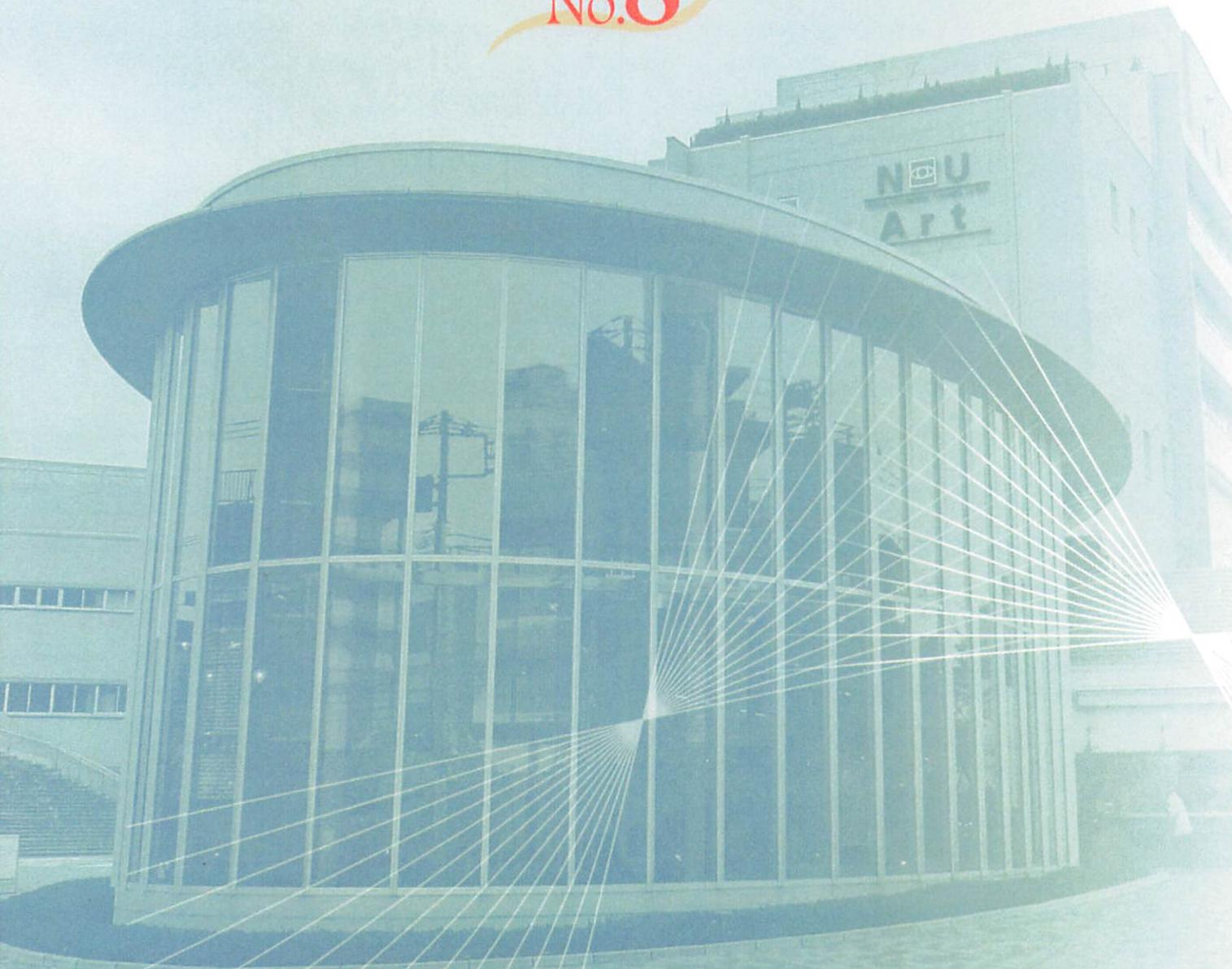


# 日藝ライブラリー

NICHIGEI LIBRARY

日本大学図書館芸術学部分館活動誌

No.8



特集 芸術ワンダーランド

Nihon University College of Art

日本大学図書館芸術学部分館

# レポート、そして、論文執筆のための参考文献の探し方

日芸図書館の参考図書コーナー、そして、グループ閲覧室の蔵書について

木村三郎（元日本大学芸術学部教授）

## I. 参考図書とは何だろう。

### I-1 広辞苑と漢和辞典

日芸に入学して来られた学生諸君たちの中には、江古田駅に掲げられた日芸の案内には、「日芸」と書く代わりに「日藝」という漢字が使われているのに気づいているかたは少なくないであろう。何故、そこで、「芸」のかわりに「藝」の旧字が使われているのか、と思われることは、不思議ではない。関心を持った諸君は、自宅にある身近な国語辞典や漢和辞典を開くであろう。実家から通う諸君は、大きな辞典では『広辞苑』で調べる人もいるであろう。しかし、手元に、そうした分厚い辞典、あるいは、しっかり書いてある漢和辞典がない場合、どうするか。その際は、高校時代に経験しているように、図書館に調べに行くわけである。

ところで、『広辞苑』（岩波書店）、あるいは、より、情報量の多い『精選版・日本国語大辞典』（小学館）<sup>1</sup>という、厚手の、あるいは冊数のかさむ辞典は、日芸図書館では、どこに置いてあるだろうか。これは、それほど難しいわけではなく、辞典が並んでいるコーナーに行き、国語辞典、漢和辞典が配架されているところに行けば、すぐ手に取ることができる。

しかし、ここで指摘したいことは、そうした身近な辞典のことではなく、それらが配架されている図書館の中の「参考図書<sup>2</sup>」と書かれている書棚群の中の、本格的な辞典・事典のことである。新入生諸君たちの中では、この系列の図書類に頻繁に手を出して来た諸君は、多くはないと思われる。通常の高校での教育、そして受験準備の段階では、図書館の配架方法の必然性に関する話は出ないからである。

### I-1-1 ネット情報と、参考図書の中の情報の違い

ネット情報はまことに便利なもので、筆者も毎日お世話になっている。上記の、国語辞典としては、最も精緻な情報がある『精選版・日本国語大辞典』（小学館）の内容も検索が可能である。その意味では、今さら図書館の参考図書コーナーにでかける意味もないともいえる時代である。

では、参考図書コーナーに足を向ける意味は、どこにあるのか。これこそが大学で学ぶ理由の一つである。たとえば、旧字「藝」の歴史と意味が手元の小型の漢和辞典でははっきりしない場合、参考図書コーナーでは、その横に並んでいる厚手の漢和辞典（たとえば、白川静『字通』1996）に、好奇心がある諸君の手は動くであろう。あるいは、全12巻に及ぶ、諸橋轍次著『大漢和辞典』<sup>3</sup>（図1）に触れる人もいるかも知れない。入り口としてのネット情報には、無論価値がある。しかし、大学で学ぶということ



図1. 「大漢和辞典」 大修館書店

とは、ネットの執筆者が活用し引用した、原著の辞典そのものに触れることである。ネットに匿名で書かれているものは、その中の一部を要約したものにすぎず、時には、その要約者が間違って書いているものもあるからである。

### I-2 百科事典を開けて見よう・・・文献案内を探す

WIKIPEDIAは、大変な成功を集めた百科事典である。一方で、図書館には、冊子体の百科事典が並んでいる。ところで、和文百科事典とWIKIPEDIAの和文版との違いを考えたことがあるだろうか。それは、検索した項目に、執筆者名が明記されているかどうか、そして、そこに、専門家によって選ばれた参考文献が書かれているかどうかである。百科事典を、このような視点から開けたことがあるだろうか。

### I-3 芸術学関係文献は、どのように探して、どの本から読んだらよいのか

芸術学部の講義で、芸術学、あるいは、美学、という芸術理論全般、あるいは基礎の学問を学ぶ際の、参考図書にも触れておきたい。たとえば、浮世絵師、喜多川歌麿について関心を持ったとしよう。WIKIPEDIAを見れば、色彩図版で主要作品が紹介され、その生涯、そして、歴史的な評価も理解できる。しかし、問題は、そこからである。WIKIPEDIAには、詳しくは書かれていても、その項目の著者名が書かれていない、ということは、執筆者がどこまで正確に調べて、書いているのかはわからないのである。

大型図書のコーナーには画集が多数並んでいて、そこに行けば、背表紙から、歌麿の画集を見つけることはできる。日芸のOPACを検索すれば、無数の関連文献が見つかり、棚の前まで行けば、多くの図書が並んでいる。しかし、レポートを書くとしても、それらのすべての本を読むことなどできるわけがない。どうすればよいのだろうか。

百科事典以外では、歌麿についての項目を専門家が書いた大部の参考図書はあるのだろうか。無論、日芸図書館開架に配架されている。たとえば、「國史大辭典」(吉川弘文館、1979-97.17冊)(図2)が挙げられる。これは、日本の歴史を網羅的に見て書かれた大辞典であり、無論、芸術学関係項目も、関連学会で著名な執筆者が担当している。限られた数の、しかも、学会で評価が高い参考文献が記されて



図2. 「國史大辭典」吉川弘文館

いる。この辞典が刊行された時期の、歌麿研究の権威であった植崎宗重氏が、無数にある先行研究の中から、2件に絞り込んだ文献を示している。著書によつては、大型画集のコーナーか、一般図書のコーナーでそれらに手を触れることができる。多すぎる参考文献は、かえって混乱してしまうのである。<sup>4</sup>

WIKIPEDIAにも、参考文献が書かれていて、1990年代半ば以降刊行の文献については、無論参考になる。しかし、繰り返せば、限られた場合を除いて、専門家が書いたものかどうかはわからないのである。関心がある科目的レポートを書く場合、そして、卒業論文のための資料収集には、専門家を見つけ出すための、基礎的で、容易で有効な方法である。

## II. 参考図書コーナーの洋書

洋書の参考図書は、参考図書コーナーの書棚と、グループ研究室の書棚に分かれている。

### II-1 洋書文献は、事典項目から読み始めよう

日芸図書館には、参考図書コーナーにも<sup>5</sup>、一般図書のコーナーにも洋書も多く配架されている。しかし、関心がある作家についての、たとえば英語で書かれた文献を読みなさい、と言われても、そんなに容易に読みこなせるものではない。では、そうした必要が生まれた時には、何から手を付けたらよいのか。

たとえば、ロートレックという画家に関心を持ったとしよう。洋書の画集の並ぶコーナーに行って、そこに並んだ文献も机上に並べることは結構なことで、開けば、多数の色彩図版が目に飛び込んでくる。



図 3.「ニューグローヴ世界音楽大事典」講談社

しかし、ページ数も多い大部な説明を一気に読み下せる人は滅多にいない。文学部の英語英文学専攻の学生の場合はともかく、制作系芸術学部の場合、基礎教育においてはその必然性が高くなっているからである。しかし、学生諸君の中には、間違いなく、英語文献を読みこなせる資質と学力を持った諸君がいることは、長年の経験から断定できる。

ではどうすべきなのか。その経験からの、若干のアドバイスを書いておきたい。提案したいことは、ロートレックならば、やはり、英語で書かれた芸術学事典の項目から始めることである。ただし、その前提の作業としては、先に書いたように、先ず、和文の主要文献を探し、それを読み終えていることである。洋書参考図書コーナーには、*The Dictionary of Art* (Grove, 1996) (図4)<sup>6</sup>、という34巻の事典がある。それに手を差し伸べて見よう。

しかし、ロートレックについて長い解説のある項目を見つけ、そのコピーをとったからといって、そ

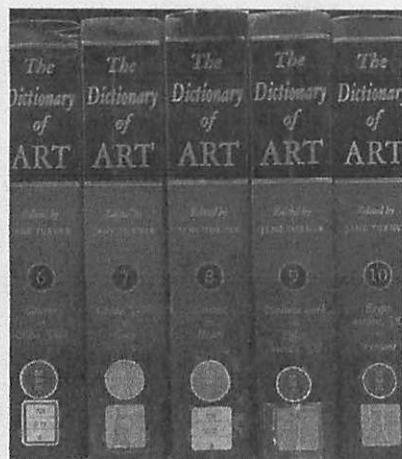


図 4 .The Dictionary of Art, Grove

れども、簡単には読みこなせるわけではない。そこで、推薦する挑戦法は、自分に関心がある作品で、すでに和文図書で調べてあるものについて書かれている箇所（たとえば、レポートで書こうとしている作品）の前後を、分かる範囲でじっくり、辞書を片手に読むことである。色彩図版はWIKIPEDIAなどで探し、別の手作業で、それをパワポに挿入しておくと、断然、分かりやすくなる。

一方で、日芸の学生諸君の強さは、作品を制作していることであり、関心がある作品の技法などは、単語の意味が分からなくとも、すぐに理解してしまうケースが多い。

他の作品についても、同じ作業を繰り返すと、自然に、解読できる部分が増えて行くのである。

## II-2 洋書の基礎文献を探す

### II-2-1 卒業論文の場合

日本の芸術学関連の基礎文献の調査法については、述べた。しかし、卒論になると、西洋の芸術家についての研究に関心を持ち、大学院に進学したいと希望する人が毎年現れてくる。ここでは、そうした希望にもこたえられる参考図書があることを記述したい。しかし、その際の調査法も、実は変わらないのである。洋書といえども、選ばれた参考文献を記述した参考図書から始めることがある<sup>7</sup>。邦文事典の場合と同じように、たとえば、英語で書かれた文献で、2, 3の洋書参考図書の文献案内で、共通して推薦されたものを、目標とすればよいわけである。1, 2点の文献を探しだし、自分のテーマに関する関係個所を、じっくりと読み込むことは、事典の場合と同じように、手が届く範囲にある。

### II-2-2 修士論文、そして、博士論文の場合

修士文献の場合も、探索法は卒論の場合と変わりではなく、さらに上級の参考図書を使うこととなる。一方で、博士論文はどうか。この場合も、基本は同じである。しかし、判断基準には、一層高度なものが求められる。

## III. 博士論文と洋書の原典にあたることの重要性

### III-1 グループ閲覧室の洋書参考図書

参考図書コーナーの隣に位置する、二つのグループ閲覧室には、芸術学の隣接分野である、哲学、宗教学、歴史学、古典学、建築学、図像学、美術学、デザイン学という広範な分野の参考図書<sup>8</sup>が配架されている<sup>9</sup>。

### III-2 グループ閲覧室の洋書原典叢書

博士後期課程の必修のコマである「芸術学特殊研究」では、西洋の古典古代の言語と芸術論に長じた方々が、長く担当されてきた歴史がある。そこで学び、関心を持った院生が、博士論文の一部に、たとえば、アリストテレス、あるいは、オウィディウス等の著作からの引用をせざるを得ない場合もある。岩波文庫などには邦訳もある。しかし、ネットで公開される博士論文の水準では、邦訳だけからの孫引きには、しばしば問題が指摘されるのである。つまり、論文の本質的な部分での引用では、何語であれ、原典にあたるという努力が求められるのが博士論文なのである。代表的な叢書である、古典語と英訳が対照されている「ロエブ・ギリシア・ローマ古典叢書 Loeb Classical Library」(図5)と、同じようにフランス語訳と対照されている「ベル・レットル・ギリシア・ローマ古典叢書 Belles Lettres」とが並置されている<sup>10</sup>。一方で、近代批評史の古典であり、使い込まれた「ミンコフ近代芸術学叢書 Minkoff」(図6)がある。

ちなみに、グループ閲覧室2には、こうした洋書参考図書を駆使して執筆された、以下の博士論文が設置されている。各論文の巻末参考文献表を参照されたい。

2003 安室可奈子『フランス・ジエラールとプシュケ図像』

2006 出羽尚『ターナーの風景画の構成』



図 5. Loeb Classical Library ロエブ・ギリシア・ローマ古典叢書

2009 田中麻野 *Gustave Moreau et l'estampe*, Université de Paris IV<sup>11</sup>

2016 秋元優季『ジョルジュ・ド・ラ・トゥールによる《マグダラのマリア》について：オイル・ランプの象徴的意味』

なお、下記の論文は、本稿の前半で述べた邦文参考図書を十分に使いこなした労作である。

2009 田口文哉『「本の絵」の鼠と「壁の絵」の鳳凰、動物表象はいかに使われたか：動物の「擬人化」をめぐる、日本の中・近世絵画史における動物表象の社会的機能に関する研究』(本稿の一部は、美術史学会賞を受賞している)

2013 金志賢『江戸初期における「絵本」の可能性に関する研究：相合傘図、歌仙絵、雛形本における、図像の誕生と変遷を辿る』

{以下3件は、博士論文が、その後刊行された}

2015 打林俊『絵画に焦がれた写真：日本写真史におけるピクトリアリズムの成立』森話社



図 6. Collection Minkoff, ミンコフ近代芸術学叢書

- 2016 山中千春『佐藤春夫と大逆事件』論創社  
 2023 李瑛恩『朝鮮国民女優・文藝峰の誕生・日本植民地下の女優形成史』青弓社

(以下2件は、それぞれ、東京芸術大学、神戸大学で博士号を取得後、研究員として日本大学芸術学部で研鑽をつみ、論文が刊行となった)

2022 船岡美穂子『ジャン=シメオン・シャルダンの芸術』東京、中央公論美術出版（渋沢クローデル賞受賞）

2023 大杉千尋『グリューネヴァルト〈イーゼンハイム祭壇画〉への説い』東京、教育評論社

- 1 2006 小学館国語辞典編集部（編）『精選版・日本国語大辞典』全3巻、東京、小学館
- 2 英語では、reference book
- 3 1955-60 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、第9巻には、①うある、まく ②わざ、そしてこれ以外にも多数の意味が詳述してある。本来が「植える」という意味であるために、草冠がついているわけである。こうした意味が変遷して、我々が使っている「芸術」という漢字が生まれたのである。2023 津上英輔『美学の練習』春秋社、p.138を参照のこと。なお、以下に示す事典の写真には、日芸の先輩たちがいかに使い込んで来たかを示すために、全体図ではなく、敢えて、汚れが目立つ部分を示した。
- 4 さらに関心がある諸君は、百科事典である『Japonica 大日本百科事典』、『ブリタニカ国際大百科事典』の中の、文献紹介のある頁も開いて見よう。そして、その後に刊行された、日本史百科ともいえる2000-01『日本歴史大事典』（小学館、4巻）にも、選ばれた和文文献が確認できる。
- 8 学科の全ての分野の芸術学については、紙面の都合上、ここには書き得ない。しかし、個別分野における、代表的な優れたものでは、西洋文学では、1996-98『集英社・世界文学大事典』（6巻）、演劇では、1960-62『演劇百科大事典』（6巻）、音楽では、1993-95『ニューグローヴ世界音楽大事典』（23巻）（図3）に、この趣旨にそった参考文献が認められる。西洋美術史で

は、1994『三省堂西洋絵画作品名辞典』。なお、より有効な方法は、たとえば、歌磨についての文献でも、2,3の主要な参考図書に、共通して推薦されている文献を、優先して探すことである。ここが重要であり、無駄なく選び出すためのコツである。

- 5 日芸で、必修選択科目である、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語などで書かれ、参考文献も記述された百科事典も、同じ棚に並んでいる。しかし、やや議論が広がりすぎるので、ここでは詳述は控えたい。されど、英語以外を学んだ諸君たちには、先ず、触り、聞いてみる応用力を期待したい。
- 6 図書館に並んでいるこの事典は、先輩諸氏たちによって使いこまれている。音楽の『ニューグローヴ世界音楽大事典』（既出）の場合と同じで、双壁であり、誇るべき事実である。
- 7 たとえば、西洋美術史では、1994『三省堂西洋絵画作品名辞典』；(1992) 1998 デューロ (P.)・グレンハルシュ (M.)『美術史の辞典』東信堂、中森義宗・清水忠共訳；2001 BRIGSTOCKE (H.), (ed. by), *The Oxford Companion to Western Art*, Oxford University Press, の事典に記述された参考文献で、やはり共通して書かれているものが、優先されるべきである。各専門分野については、学科の西洋芸術史ご担当の教員にお尋ねいただきたい。
- 8 配架されている各種の洋書参考図書には、大半の項目に、高度な参考文献が紹介されている。たとえば、下記のように、博士論文で演劇論を学んでいて、どこかでたとえば、プラトンの哲学を引用しなければならなくなったりした際に、選ばれた原書を探すために閲覧するものである。この問題は別稿に譲りたい。
- 9 西洋美術史研究を中心とした参考図書についての、更に詳しい解説は、拙著『西洋近代絵画の見方・学び方』（左右社、放送大学叢書、2011）p.208-220を参照されたい。
- 10 この叢書の選書は、映画学科・内田精一教授、ベル・レットル叢書、並びに、フランス人名辞典等は、芸学科・長塚隆二教授を中心とした、かつての専任教官たちのご努力のたまものである。
- 11 修士課程は、本学大学院芸術学研究科で修了し、博士号は、パリ第IV大学（ソルボンヌ）で取得。